



## ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花熊, 暁 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00003027">https://doi.org/10.24729/00003027</a>

## ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義と課題

花 熊 暁

関西国際大学

### 要 旨

国連の障害者権利条約の批准を受け、インクルーシブ教育システムの構築が目ざされている現在、小・中学校に強く求められているのが通常の学級におけるユニバーサルデザインの学級・授業づくりである。通常の学級のユニバーサルデザイン化の試みは、特別支援教育が法制化された2007年頃に始まり、いま全国各地の小・中学校で実践されている。

本論文では、児童生徒の多様なニーズに対応するためのユニバーサルデザインの学級・授業づくりについて、取組の背景と経過、これまでに行われてきた実践の内容を整理し、その意義について論じると共に、特別支援教育の視点に立ったこれまでの実践の課題について述べ、今後の取組においては特別支援教育と教科教育法のコラボレーションが不可欠なことを指摘した。また、インクルーシブ教育システムにおけるユニバーサルデザインの学級・授業づくりの位置づけについて論じた。

キーワード：インクルーシブ教育システム、特別支援教育、通常の学級、ユニバーサルデザイン

### 1. はじめに

2016年は、学校教育、とりわけ特別支援教育・障害支援について大きなエポックとなる年であった。4月には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（通称：障害者差別解消法）」が施行され、公的機関に対しては、障害者差別を解消し、障がいのある人たちの社会参加・貢献を実現するための基礎的環境整備と合理的配慮が法的に義務づけられた。また、5月の教育再生実行会議の第九次提言では、発達障害を始めとする特別な教育ニーズがある幼児児童生徒への配慮・支援の取組の必要性が述べられた。さらに、次期学習指導要領における特別支援教育の在り方については、特別な教育ニーズの捉え方が、従来の「障害別」の対応から「子どもが示す困難さ」への対応と改められ、特別支援教育それ自体が、過去の「障害のある子どもへの対応」から、学校種・学級種を問わない「困難さ（特別な教育ニーズ）のある全ての子どもへの対応」を旨とするものとなっている。

このような動向の中で、いま強く求められているのが、小・中学校、高校（中等教育学校を含む）の通常の学級の授業と学級づくりのユニバーサルデザイン化である。本稿では、このユニバーサルデザインの学級・授業づくりについて、取組の背景と経過、これまでに行われてきた実践の内容を整理し、その意義と問題点、今後の課題について論じたい。

### 2. ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの始まり

特別支援教育の関係者の間で、通常の学級のユニバーサルデザイン化が課題とされ始めたのは、改正学校教

育法が施行され、特別支援教育が法制化された2007年頃からである。その経緯を一般社団法人日本LD学会大会の発表論文集で検索すると、学級・授業のユニバーサルデザイン化は、「特別支援教育の視点を通常の学級の学級・授業づくりにどう生かすか」をテーマとしたシンポジウムで取り扱いが始まっている（表1）。

表1 日本LD学会大会シンポジウムでの取り扱い

年度	大会名	取り扱い領域	テーマ
2008	第17回 広島大会	自主 シンポジウム	特別支援教育の視点に立った通常の学級の クラスづくり・授業づくりを考える
2009	第18回 東京大会	大会企画 シンポジウム	通常の学級で「特別支援教育」をどう進めるか ～特別なニーズがある児童生徒のための 学級・授業づくりの実践を考える～
2010	第19回 愛知大会	大会テーマ	通常の学級における特別なニーズをもつ子ども の支援

2008年に行われた自主シンポジウムは筆者が企画したものであったが、シンポジウムの当日、定員の倍近くの参加者で会場が溢れるという状況となり、このテーマに対する特別支援教育関係者の関心の高さが示された。そのこともあって、翌年には本テーマが大会企画シンポジウムとして取り上げられ、さらに翌年には、「通常の学級における特別なニーズへの支援」が大会テーマとして設定されている。その後、ユニバーサルデザインの視点に立った学級・授業づくりは、通常の学級の運営に不可欠な取組課題として学校関係者の注目を集め、全国各地で実践が行われると共に、多くの出版物が公刊されるようになった。

### 3. ユニバーサルデザインの学級・授業づくりが求められた背景

通常の学級で特別支援教育の取組が行われるようになったのは、国のモデル事業や推進事業が始まった2001年頃からであるが、当初の取組は、通常の学級に在籍するLD（学習障害）、ADHD（注意欠如多動性障害）、高機能ASD（自閉症スペクトラム障害）等のいわゆる「知的な遅れのない発達障害」への個別的な配慮・支援から始まった。その際、支援の対象とされたのは、授業中じっと座っていることができない、他児とのトラブルが頻発するといった行動面の問題や、対人関係やコミュニケーションなど学校生活適応面の問題を抱える子どもたちであり、この時期には、行動面や学校生活適応面の問題はないが、学習面に困難を抱える子ども（LD児など）は支援の対象とはなっていなかった。しかしながら、小・中学校の通常の学級で特別支援教育の実践が行われるにつれて、通常の学級における様々な課題が浮き彫りになり、そのことがユニバーサルデザインの学級・授業づくりの必要性の認識へとつながっていく。

#### （1）特別支援の対象児の拡大

ユニバーサルデザイン化の必要性の重要な背景となったのが、通常の学級の実態である。通常の学級には、発達障害の問題だけでなく、①学習面の困難（学習の遅れ、学習意欲の低下）、②学校適応の困難（不登校、高校中退）、③学級集団内の深刻な問題（いじめ）、④就学・進学移行上の問題（小1プロブレム、中1ギャップ）、⑤養育環境上の問題（生活リズムの乱れ、虐待・放任による愛着障害）、⑥生徒指導上の問題（非行）などのさまざまな問題が多発しており、障害の有無にかかわらず、個に応じた配慮・支援を必要とする子どもたちが学級の中に多数存在していた。文部科学省が実施した全国実態調査結果（文部科学省、2012）では、小・中学校の通常の学級において学習面や行動面に著しい困難を示す児童生徒は6.5%とされているが、この数値は

全国の平均であり、地域や学校によっては、困難を示す児童生徒の割合はさらに高いことも多い。

これら通常の学級で見られる問題は、発達障害とも深く関連しており、学力面の問題や不登校・いじめ等の生徒指導上の問題を主訴とする児童生徒の中に、発達障害の子どもたちが多く含まれている。また、こうした問題を抱える児童生徒は、発達障害がなかったとしても、発達障害の子どもたちと同様の支援を必要としている。したがって、学校・園における個に応じた支援は、発達障害の児童生徒だけにとどまるものではなく、発達障害を含めた通常の学級で困難を抱える児童生徒全体を対象にしていく必要があった（花熊，2012）。この点については、2005年の中教審答申ですでに、「特別支援教育の推進がいじめや不登校の未然防止、確かな学力の向上や豊かな心の育成につながり、学校教育が抱える様々な問題の解決や改革に役立つ」と指摘されている。

以上のような通常の学級の現状は、「従来の学級運営、授業方法では、特別支援対象児の拡大に対応できない」という学校現場の危機感を生み、そのことが学級・授業のユニバーサルデザインの必要性の認識につながっていったと言える。

## （2）個のニーズに応じた配慮・支援の土台づくりの必要性

もう1つ重要な背景となったのが、個のニーズに応じた配慮・支援（特別支援）とそれが行われる学級の関係である。通常の学級での特別支援教育が始まった当初、発達障害をはじめ特別な教育ニーズがある個々の児童生徒への配慮・支援のみが考えられていた。確かに、特別なニーズがある子どもへの支援は真っ先に求められることであるが、これらの子どもたちに効果的な教育支援を行うためには、配慮・支援の実践の場である通常の学級がよい状態になればならない。図1に示すように、学級の運営がうまくいかず、授業中も学級内がざわざわしている状態では、クラス担任や授業担当者は子どもたちを掌握し、授業を進めるだけで精一杯の状態に陥ってしまっ、個に応じた支援を必要とする子どもに目を配ることができなくなってしまう。また、行動面につまずきがある子どもの場合は、ますます落ち着きがなくなり、周囲の子どもの不適切な行動をモデルとして取り込むという間違った学習をしてしまいがちになる。こんな状態では、支援対象児のために個別の指導計画を立てたとしても、それを計画通りに実践することは困難である。その点で、通常の学級が適切に運営されていることは、学級内で個に応じた支援を展開していくための絶対的な基盤であり、学級運営や授業の進め方など、通常の学級の在り方そのものから考えていく必要がある（北脇，2010，2011；花熊・他，2011；高山・他，2009；全日本特殊教育連盟，2010）。図2のように、通常の学級で特別支援教育を展開していくためには、「個のニーズに応じた配慮・支援」と「個に応じた配慮・支援を可能にする学級・授業づくり」の2本の柱が必要であり、このことからユニバー

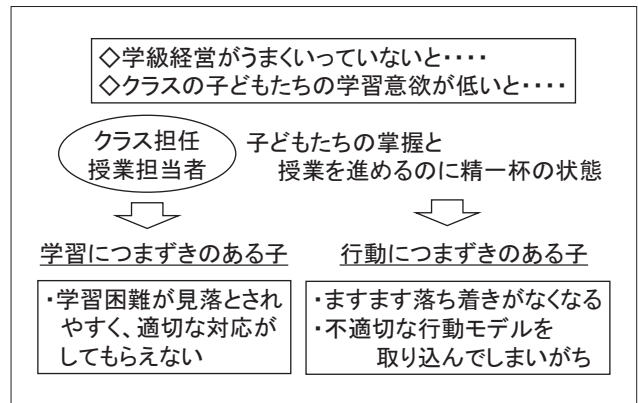


図1 個に応じた支援の基盤としての学級と授業

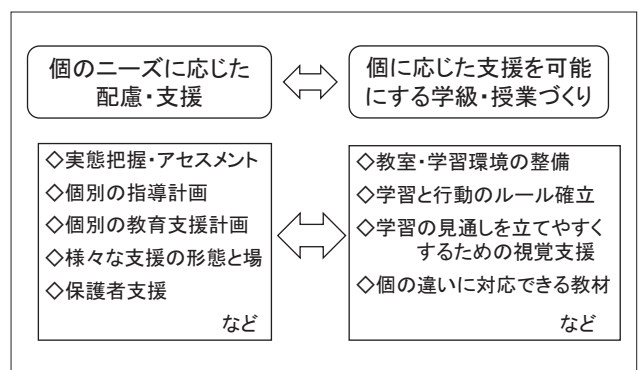


図2 通常の学級の特別支援体制づくりの2本の柱

サルデザインの学級・授業づくりが求められたのである。

#### 4. ユニバーサルデザインの学級・授業づくりはどのように進められてきたか

##### (1) 特別支援教育からの提言

ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの提言は当初、小学校において、特別支援教育の担当者側から通常の学級の担任に向けて行われた。そこでは、「発達障害の子どもには『ないと困る支援』は、どの子にも『あると便利な支援』である」という観点のもと、表2のように、①子どもが学習しやすい教室・学習環境を整備する、②学校生活における学習と行動のルールを明示する、③授業で学習の見通しが立つように視覚的支援を行う、④多様な子どもの状態に対応するための学習支援グッズを用意する、⑤個の違いを尊重しあう肯定的な雰囲気を持った学級風土を形成する、などの項目が示された。さらに、こうした取組が、ある学級、特定の教師によって行われているだけでは、クラス替えや担任が変わったときに、かえって子どもたちの間に混乱を招くリスクがあることから、学校の教職員全体がユニバーサルデザインの学級・授業づくりについて共通理解し、学校全体で共通の視点に基づいた取組を行うことの必要性が指摘された。

中学校においては、教科担任制であることや生徒指導面の課題、部活動など小学校とは異なる状況から、ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの取組が遅れていたが、ここ数年、学校全体もしくは地域全体で取り組もうとする動きが高まっている（花熊・米田，2016）。

表2 授業づくり：12のポイント（花熊・他，2011）

##### 1. 教室が整理整頓されている

- \*余分な刺激を少なくする。 \*前の黒板は授業に関係ある情報だけにする。
- \*ファイルや荷物を置く場所を一目でわかるようにする。

##### 2. 学校生活の見通しをもたせる

- \*今月の予定を知らせる。 \*1日の予定表を提示して見通しをもたせる。
- \*その時間の授業の流れを知らせる。

##### 3. 子どもたちに正しい姿勢を意識づける

- \*立つときの姿勢、座るときの姿勢、聞くときの姿勢などを意識づける。
- よい姿勢で学習に臨むことは、授業への集中と学習態度の形成につながる

##### 4. 教員も子どももていねいな言葉をつかう

- \*授業はパブリックな時間であるという意識をもたせる。

##### 5. 「話すルール」を確立する

- \*場に応じた言葉づかいを指導する。
- \*話してはいけない場面では、勝手に話さないという「話すルール」を確立する。
- \*「ちくちく言葉」（他者を傷つける言葉）と「ほんわか言葉」（他者を思いやる言葉）を明示する。

##### 6. 授業の始めと終わりをはっきりさせる

- \*チャイム着席など時間のきまりを守る。
- \*始めと終わりのあいさつをきちんとする（体の姿勢、視線の方向を含む）。



**7. 指示の出し方を具体的にする**

- \* 簡潔で具体的な指示を1回に1つだけ出す。
- \* 前置きして意識づける（「大事なことを言います」、「これからすることを言います」）。
- \* 指示がどこまで入っているかを教員が必ずチェックする。
- \* 「終わったら、何をしたらよいか」を知らせておき、見通しがもてるようにする。

**8. 指示・説明と子どもの活動をきちっと分ける**

- \* 聞くとき、活動するときをきちんと分ける。
- \* 活動の途中で指示を出すときは、活動をやめさせてから説明をする。
- \* 指示・説明と活動の時間の割合を考え、授業にメリハリをもたせる。

**9. 発表するときには、発表する子にクラス全体が注目するようにする**

- \* 人の話を聞くときは、「話の内容を理解しようとして聞く」、「体を向けて最後まで聞く」などの点を指導する。
- \* 「わからない」と言えることや、間違えてもだいじょうぶであることを教える。
- \* 必要な児童には、事前に発表の予告をしておく。

**10. 視覚的な手がかりを示す。**

- \* 「めあて」や「大切な所」を示すマーク、「いま」「ここ」を学習しているマークなどを用いる。
- \* 板書を分かりやすく整理する。 \* 作業の手順や段取りをわかりやすく示す。

**11. わかりやすいワークシートを用意する****12. 子どもの個人差を考慮し、基礎と発展を明確にする**

- \* ヒントカードを用意しておいて、必要な児童に自己選択させる。
- \* 学習が負担になる児童には、量や作業方法を配慮する。
- \* 「ここまでは全員がする問題」、「ここから先はチャレンジ問題」のように、取り組むべき課題のレベルを最初に示しておく。
- \* 課題が早く終わった児童には、次の課題を用意しておく。

**(2) 特別支援教育の視点に立ったユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義**

特別支援教育の視点に立ったユニバーサルデザイン化の試みは、「子どもたちが過ごしやすく学びやすい教室・学習環境の整備」と「学級の全ての子どもたちが参加できる授業づくり」から始まったが、学校全体での取組が進むにつれて「ユニバーサルデザイン化とは、単なる授業技法ではなく、学校・教師の意識改革である」との認識につながっていった。

日本の学校では、従来、学級運営や授業は教師一人ひとりに任されていたが、そうした状態では通常の学級にいる子どもたちの多様化したニーズに応えることは難しく、また、学級運営や授業に困難を感じている教師の支援にもつながらない。通常の学級に求められていることは、学校の教職員全員が「共通の視点」のもとに学級づくりや授業づくりに取り組むことであり、①学校種や学年の違い、②教科の違い、③教員個々の授業スタイルの違い、④学校で行われるさまざまな活動の場面・内容の違い、を超えた「共通の視点」を学校全体で共有することで「学校全体が変わる」ことであるという捉え方は、いま全国各地の学校や地域全体に広まっている。

学校で最も重要な授業における「共通の視点」としては、これまで3つの点があげられている。

- \* 視覚化：言葉による説明だけではなく視覚的な手がかりを用いることで、教師の指示・説明の理解をしやすくする。また、目で見ても分かりやすくすることで、教師の無駄な言葉をそぎ落とす。
- \* 構造化：「どんな目的で、何を、どのように、どこまでするか」（時間、場所、学習形態など）の見通しを立てやすくする。
- \* 協働化：教師から生徒への一方的な教授だけでなく、仲間内での双方向的な学びの関係を促進する。このことは、「一人ひとり学び方が違っていてもよい」という学級風土の形成にも役立つし、次期学習指導要領で重視されているアクティブ・ラーニングとも深く関わっている。

以上のような特別支援教育の視点に基づくユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義は、次のようにまとめられるだろう。

- a) ユニバーサルデザイン化とは、「学校・授業に子どもを合わせる」から「学校・授業が子どもに合わせる」への大きな転換であり、子どもたちの多様性、子ども一人ひとりの「学び方の違い」への対応を通じて、子どもたちの「学びの意欲」を育てる教育的アプローチとなりうる。
- b) 学校全体でユニバーサルデザイン化に取り組むことで、一定水準の支援技術（教師の接し方、授業の展開のしかた）が確保できる。また、教師の指導力を向上させるためのヒントとなり、学級運営や授業に困難を感じている教師へのサポートにもつながる。
- c) 授業で用いる支援グッズ（指示カードやワークシートなど）を学校全体で共有することで、教材の作成にかかわる個々の教師の時間的負担を軽減できる。

## 5. 新たに生じた課題

以上のような特別支援教育側からの提言は、「子どもたちが安心して過ごせる学級」、「落ち着いた雰囲気での授業」を作る上では、大いに役立った。特に、学級の子どもたちがざわざわして落ち着かず教師の話や指示が聞けない、授業中に子どもたちが勝手な行動をしてしまうと、いわゆる「授業崩壊」の危機にあった学級の担任にとっては、学級と授業を立て直すための大きなヒントになったようである。また、表2の項目12のように、学習に困難を抱えている子だけでなく、他の子どもよりも学習の速度や達成が早い子への対応も考えたことは、「障害や困難のある子への支援」の枠組みを超えて「学級の全ての子どものニーズに応える」ことを目指した点で、特別支援教育の理念をより拡大することにもつながった。

しかしながら、こうした実践が全国各地で行われたあと新たに生じたのが、「特別支援教育側からの提言に基づく取組は、落ち着いた雰囲気の学級を作るには確かに役立ったが、そのことが本当に子ども一人ひとりの学びの質の向上につながっているのか？」という疑問であった。実際、表2に示したような授業の工夫の多くは「授業の進め方」、言い換えれば、授業の「外形的側面」ととどまるもので、次期学習指導要領でも大きな課題とされている子どもの主体的な学びや思考力の育ちに関わるものではない。子どもの学ぶ力を育て、一人ひとりの学びの質を上げていくためには、授業の「外形」だけでなく、授業の「質」（中身）を検討しなければならない。

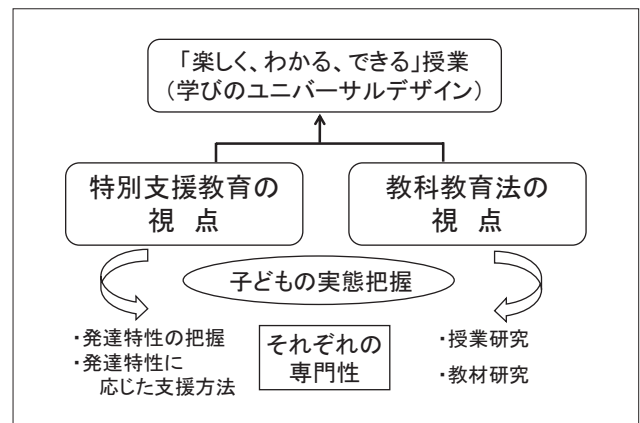


図3 ユニバーサルデザインの授業づくりに必要なこと

この課題に直面したとき、ユニバーサルデザインの授業づくりについて、特別支援教育の専門性だけでは不十分な点が気づかれるようになった。特別支援教育・障害支援を専門とする教師は、個々の子どもの発達特性の把握や特性に応じた支援方法を考えることは得意である。しかしその多くは、通級指導教室や特別支援学級などの1対1もしくは小グループでの指導で展開されることであって、多くの子どもの抱える通常の学級の授業ですぐさま応用できることではない。また、各教科の教育法それ自体は教科教育の専門領域であって、特別支援教育を専門とする教師にはよく分からないことも数多くある。そうした認識から、ここ数年、ユニバーサルデザインの授業づくりを一層深めていくためには、図3のように特別支援教育の視点（専門性）と教科教育法の視点（専門性）のコラボレーションが必要だと考えられるようになってきた。

## 6. 特別支援教育と教科教育のコラボレーションを巡って

### (1) 学びのユニバーサルデザインに関する研究会活動

特別支援教育と教科教育のコラボレーションについては、現在、2つの立場から実践が試みられている。1つは米国のCASTが提唱する「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」をもとにしたUDL研究会の研究実践、もう1つは2016年1月に結成された日本授業UD学会の研究実践である。この2つの研究会は、「学びのユニバーサルデザイン」を提唱する点では共通しているが、取組のスタンスはかなり異なっており、UDL研究会の取組は、認知科学（脳機能）に基づく学習理論と学習過程におけるICT活用が大きな特徴で、学習者の状態とニーズに応じた学習カリキュラムそれ自体を検討しようとしている（学習の困難はカリキュラムが子どもにマッチしていないことから生じるという考え方）。これに対して、授業UD学会は、伝統的な教科教育法を基盤とし、そこに特別支援教育の考え方を取り入れることで、全ての子どもが「楽しく、わかる、できる」授業を作ろうとしている。そのため、UDL研究会が目ざすのは「どう教えるかではなく、どのように学ぶか」という「学習者主体の学習」、授業UD学会が目ざすのは「授業の哲学の形成」と「教師の授業力の向上」というように、最終的な目標も異なっている。もちろんこの違いは、両者がよって立つ基盤の違いによるもので、学習者主体の学習、教師の授業力の向上という点では双方の共通性もあり、最近は両者の間でも交流が行われていることから、今後の発展が期待される場所である。

### (2) 特別支援教育と教科教育のコラボレーションにおける課題

このように、授業のユニバーサルデザイン化において特別支援教育と教科教育のコラボレーションが求められている一方、これまでまったく別個に取り組まれてきた特別支援教育と教科教育研究を統合的に取り扱うことは容易ではなく、乗り越えなければならない「壁」が数多く立ちはだかっている。

第1は、特別支援教育側の課題で、特別支援教育プロパーの教員は、個々の子どもの発達特性の把握や支援には長じているが、通常の学級とそこで行われている授業の実態と本質をどこまで把握・理解した上で通常学級担任にコンサルテーションしているかという問題がある。そのことは、特別支援教育の担当者が通常の学級の授業について助言した場合によく返ってくる「言うことは分るが、それを実際に学級で実践することは難しい」という通常学級担任の言に象徴的に表れていると言ってよいだろう。今後、特別支援教育と教科教育のコラボレーションを図るにあたっては、特別支援教育側の担当者が通常の学級の実態や授業について、より理解を深めていく必要がある。

第2は、教科教育側の課題で、教科教育の担当者には、コラボレーションの必要性の理解がまだ不十分なことに加えて、学習のつまずきの早期発見・早期対応の必要性や個の特性に応じた学び方の違い（Learning Differences）への対応については、ほとんど理解されていない現状である。特に、学校学習における合理的配



慮として強く求められているタブレットなどのICT機器の授業内使用については、授業者側のためらいや抵抗感が大きく、活用が一般化されていない。しかしながら、特別支援教育側が取り組んできた学習のつまずきの早期発見・早期対応がなければ、ユニバーサルデザインを意識した授業が行われていたとしても、学年進行の学習についていけない子どもは多数出て来る。また、LD児のように、読み書き等の困難から一般的な学習方法では教育ニーズが満たされない子については、代替的な手段の使用を認めなければ、学習課題の達成は困難になってしまう。

今後、学級・授業のユニバーサルデザイン化をいっそう推し進め、学級の全ての子どもたちの学びを保障していくためには、特別支援教育と教科教育の両者が互いの専門性を尊重・理解しあうと共に、自己の領域にない視点を取り入れあっていくことが必要である。

### 7. インクルーシブ教育システムにおけるユニバーサルデザインの意義

以上、ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義と課題について論じてきたが、最後に、国連の障害者権利条約の批准を受けて学校教育の大きな課題となっている、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築（中央教育審議会，2012）とユニバーサルデザインの学級・授業づくりの関係について述べておきたい。

2012年7月の中教審報告では、インクルーシブ教育システムにおけるユニバーサルデザインの重要性について本文で述べられているが、報告にある基礎的環境整備と合理的配慮の関係図（図4）には、その点が明示されていない。そのため学校現場（特に管理職）では、インクルーシブ教育システムを、施設・設備を中心とするバリアフリーの環境整備と特別なニーズがある子どもへの個別的な合理的配慮の「2階建て」構造として捉えがちである。しかし、学校教育（日々の授業）で重要なことは、基礎的環境整備と個々の子どもへの合理的配慮をつなぐものの存在、雨の日にたとえた図5で言えば「長靴と傘を用意すること」（=どの子にも必要な合理的配慮）であり、学級・授業のユニバーサルデザイン化は、その「つなぎ」として重要な役割を持つ。つまり、基礎的環境整備と合理的配慮の関係は「2階建て」構造ではなく「3階建て」構造なのであり、基礎的環境整備の上層には「どの子も過ごしやすい教室・学習環境」の整備が、個別的な合理的配慮の土台には「どの子も興味・意欲を持って参加できるユニバーサルデザインの授業づくり」が位置づけられる。その点で、インクルーシブ教育システムの構築と学級・授業のユニバーサルデザイン化は表裏一体の関係にあると言える。

さらに、インクルーシブ教育システムとユニバーサルデザインの関係について指摘しておきたいのは、インクルーシブ教育システムを構築するにあたっては、学級・授業のユニバーサルデザイン化に

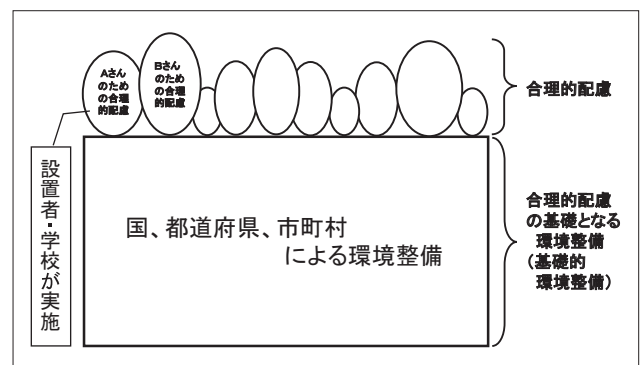


図4 基礎的環境整備と合理的配慮の関係図 (2012.7 中教審報告)

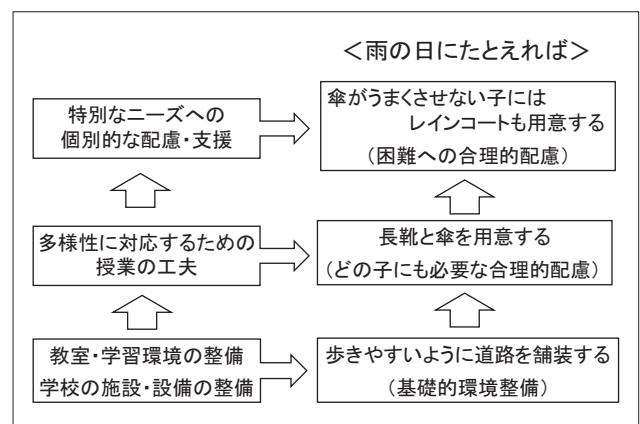


図5 基礎的環境整備と合理的配慮の関係

加えて、学校の運営組織のユニバーサルデザイン化が重要なことである。先の学級・授業のユニバーサルデザイン化の項で指摘した「共通の視点を持つことで、学校種・学年、教科、教員個々、さまざまな活動の違いを超える」という観点は、学校運営、学校組織についても同様にあてはまる。学校ではこれまで、教育（授業）研究、特別支援教育、生徒指導、人権教育、キャリア教育（進路指導・移行支援）が独立的に行われがちであったが、これらがユニバーサルデザイン化で言う「共通の視点」のもとに、統合的に行われてこそ、インクルーシブ教育の実現につながるのだという点を強調しておきたい。

## 文 献

- CAST (2008) Universal Design for Learning Guidelines V1.0. 金子晴恵・バーンズ亀山静子訳 学びのユニバーサルデザイン (UDL) ガイドライン.  
[http://www.andante-nishioji.com/udl/download/udlguidelines\\_1\\_0\\_japanese.pdf](http://www.andante-nishioji.com/udl/download/udlguidelines_1_0_japanese.pdf)
- 花熊暁 (2010) 通常の学級における特別支援教育 —ユニバーサルデザインの学級づくり、授業づくりをめざして—。特別支援教育の実践情報, 134, 8-11, 明治図書.
- 花熊暁・高槻市立五領小学校編 (2011) 通常の学級で行う特別支援教育：小学校ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり。明治図書.
- 花熊暁 (2012) 総論：個に応じた支援。特別支援教育士資格認定協会編 特別支援教育の理論と実践 第Ⅱ巻, 19-33.
- 花熊暁 (2016-a) 特別支援教育と授業UD：真のコラボレーションを旨として。授業UD研究, 1, 18-21.
- 花熊暁：米田和子編 (2016-b) 通常の学級で行う特別支援教育：中学校ユニバーサルデザインと合理的配慮でつくる授業と支援。明治図書.
- 桂聖・石塚謙二・廣瀬由美子・川上康則・日本授業UD学会編 (2017) 授業のユニバーサルデザイン, 10. 東洋館出版.
- 北脇三知也 (2010) 特別支援教育であなたの授業を変えよう。明治図書.
- 北脇三知也 (2011) 特別支援教育であなたの学級経営を変えよう。明治図書.
- 教育再生実行会議 (2016) 第九次提言：全ての子供たちの能力を伸ばし可能性を開花させる教育へ。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo14/shiryo/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/07/04/1373986\\_2\\_2\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo14/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2016/07/04/1373986_2_2_3.pdf)
- 文部科学省 (2005) 中央教育審議会特別支援教育特別委員会：特別支援教育を推進するための制度の在り方について (答申).  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801/all.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801/all.pdf)
- 文部科学省 (2012) 中央教育審議会初等中等教育分科会：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告).  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm)
- 文部科学省 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf)
- 文部科学省 (2016-a) 中央教育審議会教育課程部会：次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ。  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021\\_1\\_1\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf)

文部科学省（2016-b）中央教育審議会特別支援教育部会における審議の取りまとめ.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/063/sonota/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377130\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/063/sonota/__icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377130_01.pdf)

内閣府（2016）障害を理由とする差別の解消の推進.

<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html>

日本LD学会（2008）日本LD学会第17回（広島）大会発表論文集.

日本LD学会（2009）日本LD学会第18回（東京）大会発表論文集.

日本LD学会（2010）日本LD学会第19回（愛知）大会発表論文集.

日本授業UD学会（2016）授業UD研究, 1.

佐藤慎二・漆澤恭子編（2010）通常の学級の授業ユニバーサルデザイン —特別でない支援教育のために—. 日本文化科学社

高山恵子・松久真実・米田和子（2009）：あったかクラスづくり —通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザイン—. 明治図書.

柘植正義編（2014）ユニバーサルデザインの視点を活かした授業と学級づくり. 金子書房.

全日本特殊教育連盟編（2010）：通常の学級の授業ユニバーサルデザイン —「特別」ではない支援教育のために—. 日本文化科学社.

## **The Universal Design of the Regular Classroom Management and Teaching in the Elementary and Junior High School.**

**Satoru Hanakuma**

Kansai University of International Studies

### **Abstract**

At the present when educational needs of the children in regular classroom diversifies, the universal design of the classroom management and teaching is critically needed. The universal design of the regular classroom management and teaching began in the elementary school nearly a decade ago. The practice of the universal design spreads out in the junior high school, and this practice is carried out now afterwards in many elementary and junior high schools.

The purpose of this article surveys a background and progress of this practice when practice of the universal design was demanded and is to clarify significance of the universal design and a future problem. Future important problems include the collaboration between special support education and subject pedagogy. It is expected that the quality of the practice increases when this collaboration is realized.

Key Words: inclusive education system, special support education, regular classroom, universal design